

主体的学習を促す TOEIC®受験支援

—2年目の課題—

岡田 礼子*¹

A Second-Year Report on the Introduction of the TOEIC® to Encourage Independent Study

by

Reiko OKADA*¹

(received on Nov.27, 2015 & accepted on Dec.1, 2015)

あらまし

学生が各自の英語力を客観的に知り、主体的に学習するために、TOEIC®団体受験を実施してきたが、受験者は少数であった。受験者増加のために高得点者以外に低得点でも50点以上の上昇により副賞（受験料半額分相当）を授与する取組みを行った。必修授業では受験対策は行わないため、学生への支援として基本文法と語彙強化の選択科目を開講し体系的に指導した。実施初年度に受験者と成績優秀者が大幅に増加し、2年目は受験者が減少したが、選択科目の追加開講により学習意欲は向上している様子が見られた。今後は必修科目での英語伝達力上達が、客観的英語力評価にどう反映されるかを含めて指導し、主体的学習を支援することを検討している。

Abstract

To encourage students to develop English communication skills through independent study, we began to administer the TOEIC® IP regularly in our department, and to offer awards to students who score 500 points or more. Despite this incentive, however, we found that very few students were taking the test more than once, so we started offering further awards to those scoring 50 or more points above their previous score. In addition, basic grammar and vocabulary courses were opened as elective classes to help lower level students improve their ability. Outcomes indicate that lower level students are more motivated to study than before, and suggest that some revision of required classes is needed.

キーワード: TOEIC®, 主体的学習、英語力、客観的評価

Keywords: TOEIC®, Independent Study, English proficiency, Objective Assessment

1. はじめに

東海大学情報通信学部では、2008年の学部開設以来、世界で活躍できる情報通信技術者の養成をめざし、英語力の伸長を学部全体の目標の1つとしてきた。多様な学生の学習意欲を維持・向上させ、各自の入学時の力を段階的に高められるよう、英語教員全員でチームとなり、様々な取組みを行ってきた¹⁾。世の中のグローバル化とも相まって、学生の英語学習に対する態度は徐々に向上し、学部全体の英語の授業に対する意識は高まった。しかし、実際にどれほど英語運用力が向上したのかを客観的に測定する方法がなかった。TOEIC®団体試験を任意受験で実施したが、受験者は一部の学生に留まり、学部全体の学力の測定にはならなかった。そこで、2014年度より5か年計画でTOEIC®受験を促す取組みを始めた。

本稿では、本学部での英語教育の目的と理念を確認した後、総合的英語力を客観的に知るためのTOEIC®受験支援の取組みについて述べ、その2年目の結果を報告するとともに、問題点を明らかにする。最後に、

*1 高輪教養教育センター 教授

Takanawa Liberal Arts Education Center,
Professor

今後ますます必要となる英語コミュニケーション力養成に対して、どのような対応をすべきかを検討する。

2. 情報通信学部の英語指導の目的

情報通信学部の英語必修科目では、グローバル社会で技術者として英語による基本的なコミュニケーションがとれることと、専門分野の内容を平易な英語で伝えられることを目標としている。そのため、週2回の必修授業を2教員がペアとなって指導し、一人が言語を正確に使うこと(accuracy)を中心に指導し、他の一人が間違いを気にせず積極的にコミュニケーションをとること(fluency)をめざして指導している。

学生の入学時の学力差が非常に大きいため、それぞれの学生が学力を高めることができるよう、8レベルの能力別クラス編成で授業を行っている²⁾。上位クラスではCNNやJapan Timesなどのニュースを教材にした学習や、海外の学生とのEメール交流などを行い、グローバル社会における実際の英語に触れる機会を多く与えている³⁾。一方、下位レベルの学生には基本文法などのレメディアル教育を行い、時間が

かかっても将来グローバル社会で働く場面に備えて、きちんとした基盤作りを行っている⁴⁾。

また、英語の言語的教育だけでなく、世界の人たちと仕事する際に身に付けねばならない言語以外の能力（誰とでも言葉をかわす、複数の人の前で大きな声で話す、積極的に発言する、期日・時間に遅れずに提出・出席する、英文タイピングの基本的形式を守る、他者の文章を盗用しない、など）も、重要な学習項目として評価の一部に充てている。

そのため、英語資格試験を受験するための指導は必修科目では行っていない。受験のためのスキルを教えることは、学部がめざす英語教育の目的とは異なると思われる、また、週 2 回しかない必修授業の中で試験対策に充てる時間は全くないからである。

3. 実力を客観的に知る必要性

必修英語の授業において、毎週課せられる宿題の達成度や、授業での積極的な参加度などが、成績に大きく反映することが学生に浸透し、学部全体の英語必修授業に対する意識は徐々に高まった。さらに学習意欲を持続させ、高い目標を持って学習させるには、各学生の実力の変化を数値で提示する必要があった。

しかし、英語運用力全般を客観的に測定できるテストがなかった。学内の統一試験などで測定することも試みたが、英語の様々な項目について同レベルの試験を複数回分作成することは困難であった。また、外部試験を全員に実施するための資金もなかった。

そこで、自分の実力を把握させることを目標に、TOEIC®団体試験を学内で実施し、自主的に受験するように促した（受験料は自己負担）。一人でも多くの学生に受験させるため、2010年度より年3回実施し、500点以上の得点者は表彰し、副賞として受験料相当分のQuoカードを授与した。また、複数回受験して、学力の向上を認識させるために、100点以上上昇した学生も同様に表彰し副賞を授与した。しかし、受験者数は在学生の10%程度に留まり、500点以上を得点する学生は受験者の5~15%でしかなかった。また、繰り返し受験するのは主に500点に近い実力を持つ学生たちであり、中位レベル以下の学生にとっては、副賞は受験を促す刺激にあまりならなかった。

そんな中、採用時に TOEIC®の得点を重視する企業が急激に増加し⁵⁾、英語力を客観的に提示する必要性がますます高まった。主体的に学習させて TOEIC®の得点を上げることの動機づけが必要となった。

4. TOEIC®受験支援の開始

前述のように、必修授業では英語資格試験のための特別な指導はしておらず（選択科目では、上位中位レベル向けに数コマ開講している）、各自の総合的英語力を客観的に知るという目的のために TOEIC®の受験を促してきたが、得点アップのための準備は、学生の主体性に任せてきた。しかし、自主的にテストに備えるには、基本的な文法知識や語彙が必要で

あり、それに加えて、かなりの学習意欲が必要である。そのため、基本的な文法力や語彙力が不十分な中位レベル以下の学生には、独力で学習することは非常に難しいことがわかってきた。そこで、2014年度より 5 年間計画で学部の英語力を引き上げるために、TOEIC®受験を促す取り組みを始めた。

4.1 2014年度の新たな取り組み

2014年度から、TOEIC®支援として、以下を実施した。

- 1) 中位レベル以下の学生向けに段階的に基礎文法と基本語彙を集中的に強化する選択科目を開講し、1年生には半必修科目のつもりで履修するようにと促す。
- 2) TOEIC®の 2 回目以降の受験で、前回より 50 点以上向上した学生を表彰し、受験料半額相当の副賞を与える。

1つ目の取り組みの背景には、中学高校での英文法の学習量が激減したことにより、応用力が備わっていないという現状がある。しかし、下位レベルの学生でも、段階を踏んで基礎文法や基本語彙を学び、自分に合った学習法を習得すれば、総合的英語力を伸長することが可能である。そこで、必修科目の accuracy クラスで単発的に取り入れている文法学習を、体系的・組織的に学習させ、主体的に学習するための土台作りを目的として、基礎科目を設置した。そして、すでに開講していた TOEIC®関連科目に連携するように、学習の流れを作った (Fig. 1)。それにより、学習したことを応用すれば、TOEIC®の問題も理解できるようになることを実感させ、自分の上達を客観的に測定したいという気持ちになるように計画した。

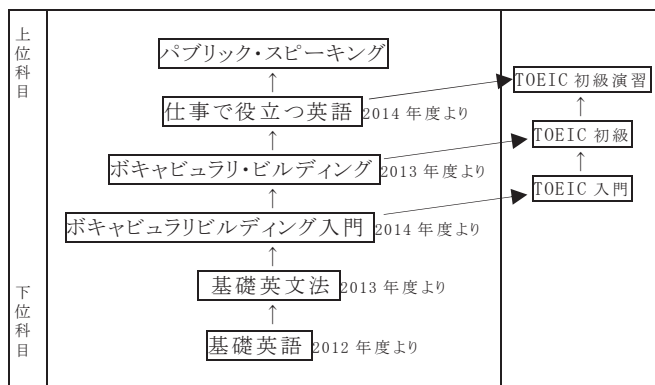


Fig. 1 情報通信学部英語選択科目のフローチャート

さらに、わずかな上達も評価し、次の目標へ向かって少しずつ学習を継続させるために行った 2 つ目の取り組みでは、2014年度開始時から、「50 点アップで表彰され、受験料半額の副賞が出る」ということを、英語の授業、昼休みの食堂、掲示、プリント配布などで周知し、6 月の TOEIC®団体試験受験を促した。自費受験であるため強制はできないが、1年生に対しては、「1 年次の間に必ず 1 回は受験し客観的

な評価を知ろう」そして「まずは1回目の受験をして次の目標を立てよう」と繰り返し伝えた。

この2つの取り組みは、今までTOEIC®受験にほとんど興味を示さなかった中位以下の学生に対する支援が中心であるが、上位レベルの学生に対しては、必修科目を抜本的に見直した。グローバル人材として働く力をつけるという目標を常に意識させるため、海外の学生とのEメール交換、Skypeでのトーク交流、ビデオメッセージ交換、CNNニュースを使った学習、などを取り入れて、専任教員が厳格に指導した。また、客観的に現在の実力を把握し、次年度までの達成目標を立てることの重要性を伝え、入学後間もない6月のTOEIC®の受験を強く促した。

4.2 2014年度の結果⁶⁾

2014年度のこの取り組みで、6月と10月に実施したTOEIC®の受験者は2013年度までと比較して、およそ2倍になり、20%程度まで上昇した(Fig. 2)。また、1年生においては、それまでほとんど10%未満であった受験率が、6月も10月もそれぞれ50%以上に上昇した(Fig. 3)。

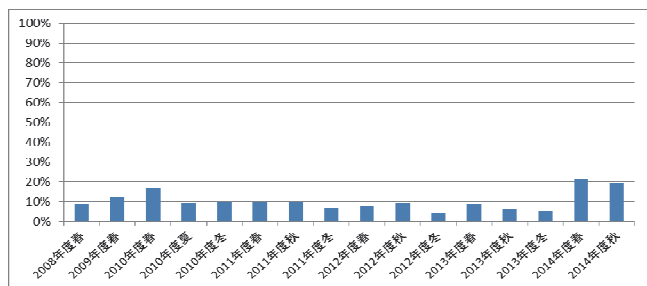


Fig. 2 全学生の受験率(%)

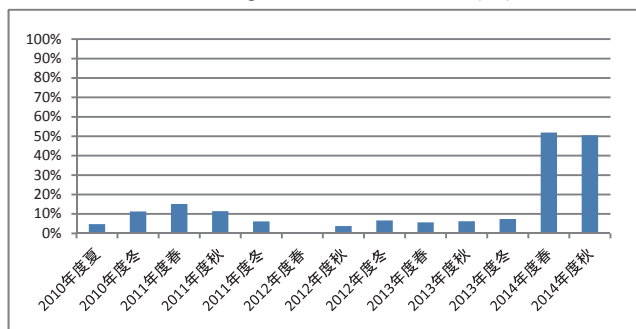


Fig. 3 1年次生の受験率(%)

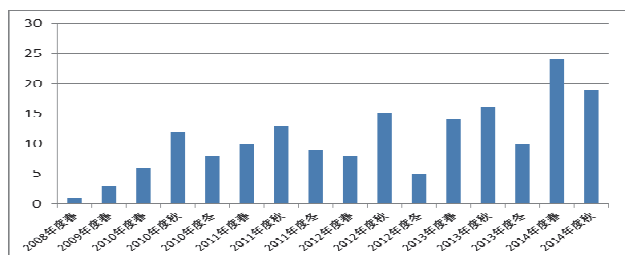


Fig. 4 500点以上取得者数(人)

さらに、500点以上の取得者も増加した(Fig. 4)。

このように、2014年度のTOEIC®受験支援はかなりの効果が得られる結果となった。(2014年度2月にもう1回実施したが、本稿では2015年度9月までの結果と比較するため省略する。)

5. 2015年度のTOEIC®受験支援

5.1 2015年度の新たな取り組み

TOEIC®受験支援5か年計画の2年目の2015年度は、さらに学生の学習意欲を高めるために、2つの変更を行った。

- 1) 基本的文法と語彙の習得を目標とする基礎選択科目の担当教員を増やし、開講コマ数を増加した。
- 2) 日常の必修授業での学習意欲を喚起するため、各セメスタの初めと終わりに団体受験を実施し、年間実施回数を3回から4回に増加した。

5.2 2015年度の結果

第1の変更として、基礎選択科目を増加したことにより、選択科目受講者は2014年度と比較して24%増加し(461人→572人)、学生の学習意欲の向上が見られた(Fig. 5)。特に基礎レベル科目(基礎英語、基礎英文法、ポキャブラリビルディング入門)の受講者は44%増(184人→265人)、中位レベル科目(ポキャブラリビルディング)は3倍以上の受講者(13人→55人)になった。基礎レベルの3科目は、本学部の学生の能力と知的レベルに合うように独自に作成した教材を使って指導しているため、基礎学習であっても、幼稚な学習ではなく、有意義な表現を使って基礎を定着させることができ、必修科目にもよい影響を及ぼしている。基礎をいい加減にせずに学習しようと思う学生が増えたことは喜ばしい結果であり、実際、そのような考え方で学習することが、TOEIC®で高得点を取得することにつながると思われる。

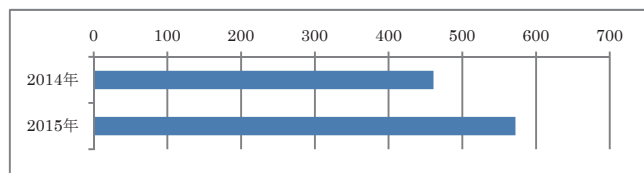


Fig. 5 選択科目受講者数(人)

第2の変更では、2014年度に春セメスタ中期(6月)、秋セメスタ中期(10月)、秋セメスタ終了後(2月)の3回実施した試験を、春セメスタ初期(5月初め)、春セメスタ末期(6月末)、秋セメスタ初期(9月末)、秋セメスタ末期(12月末)に変更し、セメスタの初めと終わりに受験させ、日常の学習の成果を

客観的に見られるように計画した。また、夏休み明けの9月の実施では、夏休み中に受験準備をすることを考え、試験申込を夏休み前に行い、夏休み中に参考書や問題集を英語研究室から貸し出し、主体的に学習するように促した。学生の学習環境を考慮し、少しでも意欲的・主体的に学習することを期待してこのように計画したが、結果は全く予想外であった。

TOEIC®受験者数は、受験回数を増やしたにもかかわらず、2014年の6月と10月の実質受験者が479人であったのに対し、2015年の9月までの3回の実質受験者は354人であり、パーセントでは33%から24%に低下してしまった。特に1年生では、受験率が76%から51%に激減してしまった(Fig. 6)。また、500点以上の得点者も33人から28人に減少したことが判明した(Fig. 7)。

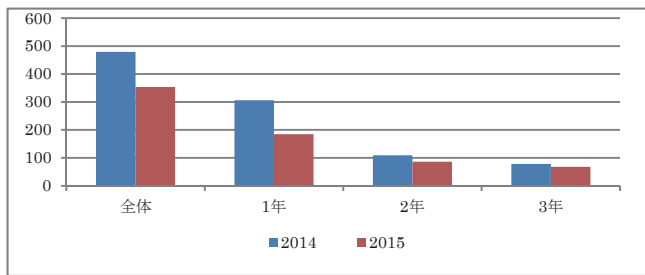


Fig. 6 受験者数(人)

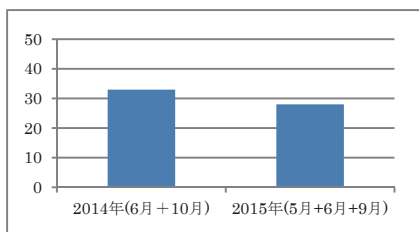


Fig. 7 500点以上取得者数(人)

さらに、夏休み明けの9月の受験者に行ったアンケート(付録1)で「夏休み中にどのように学習しましたか」と尋ねたところ、「特に学習していない」と回答した人が全回答者87名中50名(57%)であった。1年生は51名中32名(63%)、2年生は15名中10名(67%)、3年生では19名中7名(37%)であった。夏休み中の主体的な学習を期待したが、就職を意識した3年生以外は、あまり効果がなかったことが判明した。

6. 考察と今後の課題

日常の英語学習の結果を客観的に知るために、TOEIC®の受験を促し、そのための支援を2014年度から行った。1年目は受験者も高得点者も増加し、非常

に良い結果を得たが、2年目の2015年度は、同様な成果が得られなかった。1年目に多くの学生が受験したため、2年目には教員がそれほど強く受験を促さなくなってしまうのかもしれない。

また、セメスタの初めと終わりにTOEIC®を実施することで、セメスタ中の学習意欲の向上と受験者の増加を期待したが、却って学生をTOEIC®受験から遠ざけてしまう結果となってしまった。あまり頻繁に実施しても効果がないことがわかった。

しかし、TOEIC®の受験率が低下したからと言って、学習意欲が低下しているわけではないことが、選択科目の履修者の増加からわかる。むしろ学習意欲が高まり、基礎から学び直したいと思う学生が増したと考えられる。しかし、学習を深めるにつれ、自分の力不足に気づき、現実を直視したくない気持ちが強くなってしまったのではないだろうか。

英語学習の目的は、あくまでもコミュニケーション力の向上であり、決して資格試験で点数を稼ぐための学習ではない。しかし、学習の結果が得点に反映されないために、就職の際にハンディを負うことになってしまうのなら、教員としては何とか手立てを考えねばならない。今後は、普段の必修授業で学習したことがTOEIC®の問題ではどのような形で問われるか、などを少し授業に導入すべきかと考える。

日本経済新聞社の学生向け情報サイトによれば、「TOEICの第1の壁は単語、第2の壁は文法」とある⁷⁾。2014年度から実施している選択科目は、まさに同じ考え方(英語コミュニケーションのためには、基本語彙と基礎文法の習得が必須)であり、科目設定の仕方は間違っていなかったことがわかる。今後は、選択科目だけでなく必修科目においても、意識的・効率的に語彙・文法を習得させ、学力の向上を具体的に感じさせる工夫が必要であると思われる。

現在、来年度に向けて検討し始めていることには、(1)セメスタごと・レベルごとに習得すべき語彙の目標数を決め、その達成度を評価の一部とすること、(2)習得した語彙をコミュニケーション活動につなげていくことで、単純な暗記でなく、主体的に学習させる刺激となるような授業を行うこと、(3)コミュニケーション力の向上が、TOEIC®の得点に反映するよう、教材と指導法を工夫すること、(4)「TOEIC®」と名がつく選択科目の開講を増加し、その授業にプレゼンテーションなどのコミュニケーション活動を導入し(藤巻)⁸⁾、資格試験のためだけの英語学習ではないことを意識させて学習させること、(5)自立して学習する方法を個別に指導できる場を設けること、などが考えられる。

グローバル人材に必要な英語コミュニケーション

能力を身につけさせるという大きな目標に向かって指導する中で、学生が自らの能力の向上を感じ、TOEIC®で客観的に評価したいと自主的に思うようになれば、この取り組みは成功と言えるであろう。5年計画はあと3年を残す。その間に、一人でも多くの学生がそのようになることをめざして、取り組んでいきたいと思う。

参考文献

- 1) 岡田礼子他：初年次英語教育での学習習慣と意欲喚起，初年次教育学会誌，第2巻，第1号 pp64-71，2009
- 2) 岡田礼子他：公平かつ意欲を高める定期試験，東海大学紀要教育研究所 No.18 pp1-13，2010
- 3) 岡田礼子：グローバル社会に必要な英語力とその指導—視察報告と指導改善の提案—，東海大学紀要 情報通信学部 Vol.7，No.2 pp59-66，2014
- 4) 岡田礼子：理系基礎英語の組織的取り組み—発信するための文法—，東海大学教育研究所研究資料集 No.21，pp87-94，2013
- 5) 国際ビジネスコミュニケーション協会：「上場企業における英語活用実態調査」報告書，2013
http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/

- 6) 岡田礼子：主体的学習を促す TOEIC®受験支援，東海大学教育研究所研究資料集，No.22 pp45-54，2014
- 7) 千田潤一：TOEIC 超勉強法，日本経済新聞大学生情報サイト，
<http://college.nikkei.co.jp/article/41265120.html>
- 8) 藤巻新：TOEIC®クラスへの英語プレゼンテーション導入に関する一考察—学習者の英語学習への動機づけの観点から—，東海大学外国語教育センター所報，No.35，pp77-82

付録1

2015年度 第3回 TOEIC 団体試験 受験者の皆様、 今回の受験のために、どのように学習したかをお伺いしたいと思います。アンケートにご協力ください。個人が特定されることはありません。	
1 学年	(a)1年生 (b)2年生 (c)3年生 (d)4年生 (e)大学院生
2 今回は何回目の受験ですか。	(a)初めて (b)2回目 (c)3回目以上
3 2回目以上の人は、前回よりも何点上昇しましたか。	上昇しなかった、 1-25点、 26-50点、 51-75点、 76-100点、 101-125点 126-150点、 151-175点、 176-200点、 201-225点、 226-250点、 250点以上
3 今回の試験のために夏休みにどのように学習しましたか。 当てはまるものすべてに○を付けてください。	(a)大学の英語授業の復習をした。(b)自分で教材を使って学習した。 (c)大学以外の語学学校などで学習した。(d)海外留学した。場所は_____ (e)その他_____(f)特に学習していない。
4 自分で学習した人は、主に何を、どのように、学習しましたか。 当てはまるものすべてに○を付けてください。	主な学習内容は ①リスニング ②文法 ③単語 ④文章読解 ⑤その他_____ 主に使用したのは ①CDなど ②TOEIC 練習問題 ③文法書 ④単語集 ⑤英語の本や新聞 ⑥ネットの学習サイト ⑦ネットの英語サイト ⑧その他_____ 学習時間・時期は ①夏休みに集中 ②日常計画的に(1日3ページ/週30語など) ③特に決めず
5 次回は何点アップ目標ですか。	50点未満、50点程度、51-100点、101-150点、151-200点、201-250点、250点以上

ありがとうございました。次回(12月)もぜひがんばってください。